平成29年度　文化庁日本語教育大会

日本語教育テーマ別実践報告会　第3分科会
ライフステージに応じた日本語学習を支援するには
～成人の学びの在り方を考える～

難民の日本語学習を通して考える成人の学び

～RHQ支援センターでの実践から～

2017年8月27日

小瀧雅子
公益財団法人アジア福祉教育財団 難民事業本部
公益社団法人国際日本語普及協会 AJALT

難民とほかの外国人　何が違うのでしょう

1．一般の外国人⇒自分から出国　　出身国の保護あり
　　難民 ⇒強いられた出国　出身国の保護なし

母国、家族、友達、風景、食べ物、慣れてきたすべてとの別離

「新しい国に住むということは、すべてを新しくするということ。希望すら新しくするということ」（学習者の作文より）

ライフステージの断絶

2．一般の外国人　⇒各国が出入国の方針を決定
　　難民　　⇒難民条約の加盟国は引き受けが義務

日本の難民と日本語教育

・1975年　日本に最初のインドシナ難民が到着
・1978年　インドシナ難民の受け入れを閣議了解
・1979年　定住支援組織として難民事業本部（RHQ)設立
・1981年　日本が難民条約に加盟
・2008年　第三国定住難民受け入れを閣議了解

RHQは37年間、定住支援プログラムにおいて日本語教育を実施

難民のための定住支援プログラム

於：RHQ支援センター

4月 ⟷ 9月

条約難民　前期昼間コース
月ー金：9:30ー15：50

10月 ⟷ 3月

条約難民　後期昼間コース
月ー金：9:30ー15：50

条約難民　通年夜間コース　月 - 金：18:30—20:55

＊条約難民コースは昼間・夜間とも
　条約難民とその家族が受講可能
＊第三国は大人クラス子供クラスあり
＊条約・第三国とも託児支援あり

第三国定住難民コース
月ー金：9:30ー15：50　土：9:30ー12:10

生活ガイダンス
120授業時間
（外務省委嘱事業）

連携

日本語教育
572授業時間※
（文化庁委嘱事業）

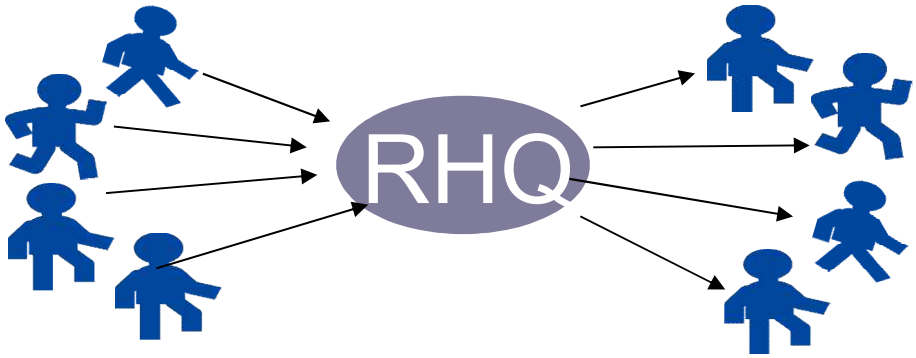
就労支援
（厚労省委嘱事業）

連携　連携

1授業時間＝45分

条約難民クラス

◆対象：条約難民とその家族
日本ですでに生活している人が多い
RHQ支援センター修了後もそれぞれの生活に戻る



◆主な出身国：ミャンマー、エチオピア、エリトリア、イラン、シリア、
アフガニスタン等々

◆2017年度前期コース
昼間：6名1クラス（ミャンマー、エチオピア、アフガニスタン等）
夜間：3名1クラス（ミャンマー、エチオピア等）

条約難民クラスの特徴

・多様性

国・宗教・年齢（10代～60代）

滞日期間（数か月～20年）・　多様な学習背景と学習スタイル

↓

・様々な日本語レベル・学習ニーズの人が混在するクラス

➡ 学習者の多様性への対応

・本国での豊富な教育・社会体験と日本の生活とのギャップ

・様々な体験から来るトラウマ

➡ 学習者の多様な背景に対する配慮

第三国定住難民クラス

◆対象：ミャンマーから逃避してきた家族

2010～2014　タイ難民キャンプ経由

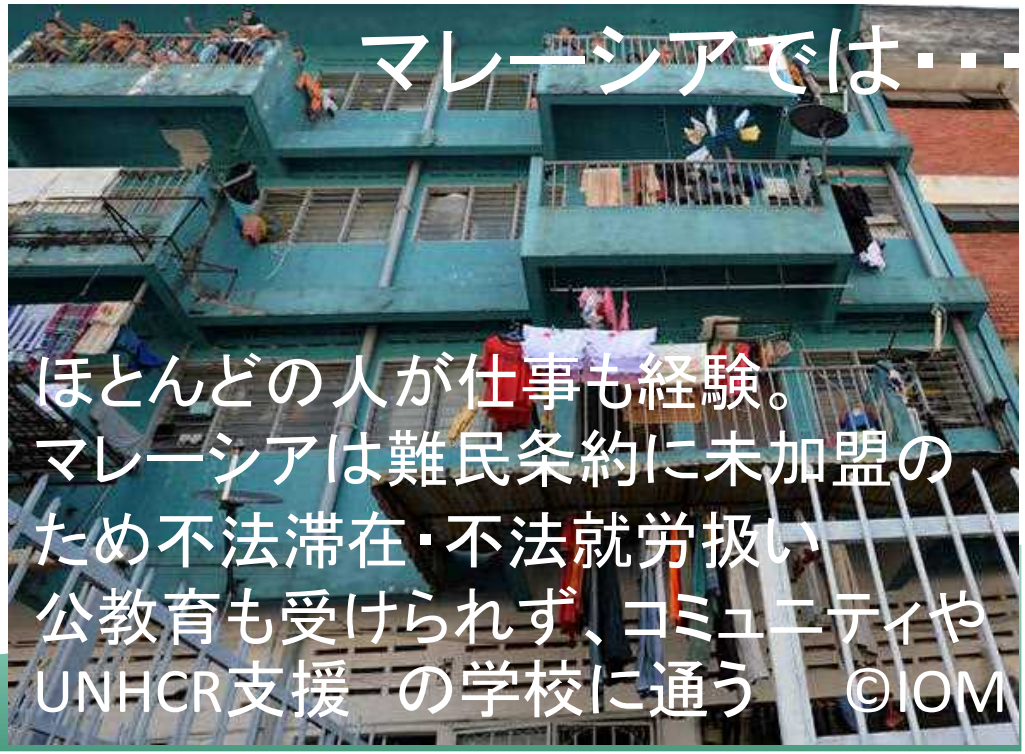
2015～　マレーシア クアラルンプール経由

◆コース　通常大人2クラス、子供2クラス編成

30名まで

出国前の生活・タイキャンプでは・・・

キャンプの中での限られた生活と教育
配給生活で仕事は公にはできない。



マレーシアでは・・・

ほとんどの人が仕事も経験。
マレーシアは難民条約に未加盟の
ため不法滞在・不法就労扱い
公教育も受けられず、コミュニティや
UNHCR支援　の学校に通う　©IOM

第三国定住難民クラスの特徴

・家族で来日
　入国から定住までいっしょに移動することが多い

・学習スタート時の日本語レベル・日本での生活経験は
　ほぼゼロ

➡ 定住を目標とした目の前のニーズ＋日本語の土台

・教育背景が少なく、抽象的な概念の理解は難しい人
　非識字者もいる

➡ 日本の生活様式に慣れるところから始める必要

日本語学習の理念
断絶したライフステージをつなぐ

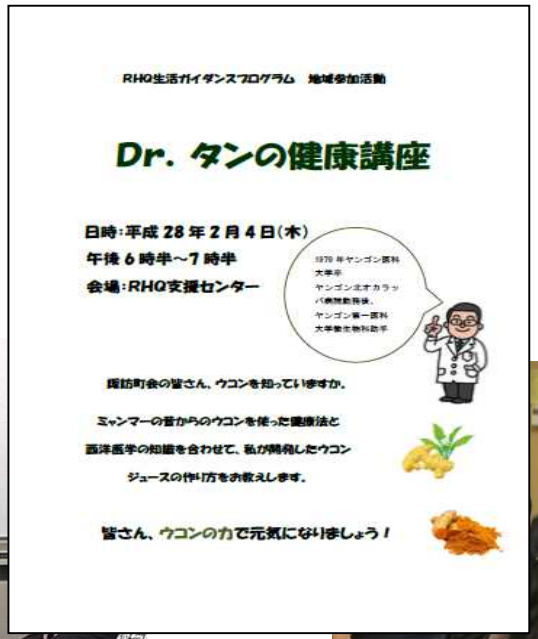
目的：日本社会で自立した生活を営むのに必要な日本語力の獲得

1．エンパワメント「元気になる日本語教育」

・・・声を出す　声を伝える

以前の仕事について説明

故郷について発表



自国での職業を活かした講演

2. 人間関係構築力

・・・新しい環境で人と積極的に関わっていく

地域での交流を積み重ねる→本物の人間関係が生まれる
学習者→定住後地域の人と積極的に関わるための土台作り
地域の方々→理解が広がるとともに関係性も変化

1回目は通訳も付き添い、
地域の方も遠巻きから

2回目は少し打ち解けて、
故郷を紹介

餅つき大会にも参加

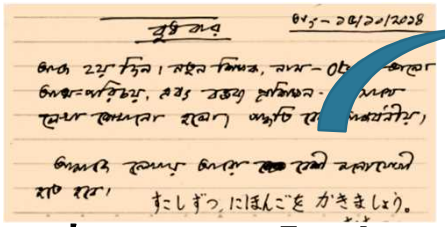
3回目は町会メンバーと
難民だけで料理も会も準備

3. 自律学習能力　ライフステージを見据えて

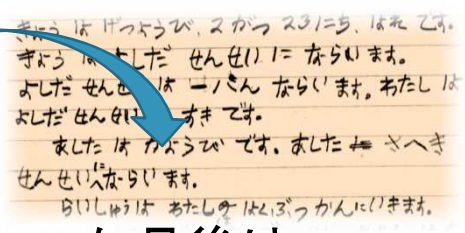
・・・学習内容を詰め込むのではなく「学び方を学ぶ」

1. 毎日の学習日記

自分の進歩の跡がわかる



初日の日記は
母国語で



4か月後は
日本語で1ページ

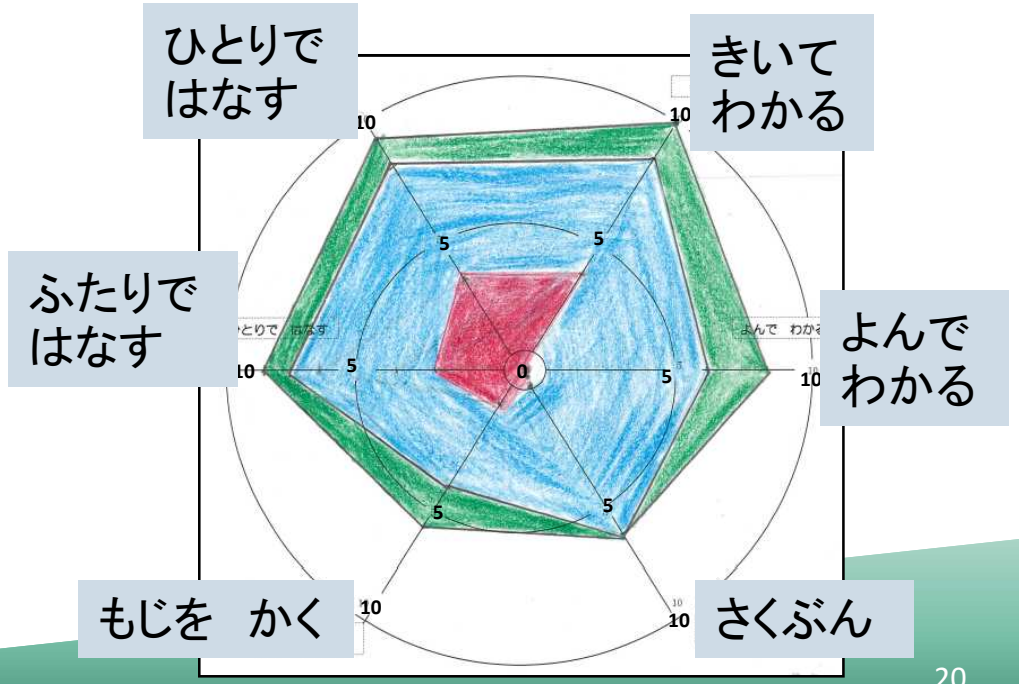
2. 自己評価表

入所時～中間時～終了時に

自己評価

自己を見つめ直し

次の目標を設定



学習内容と方法

ユニット学習
総合型学習

生活と自己表現のトピック23（条約版）

自己紹介/数に強くなる/日常生活/
街へでかけよう/仕事/健康と病気/公共施設
緊急事態/公共施設/迷惑・迷惑/比べてみよう
郵便受けに届くもの/故郷紹介/教育子育て
あなたがコーチ～地域社会に参加する
ご紹介しますこの人を　etc.（順不同）

一般言語項目
技能別学習

ひらがな・かたかな
基本漢字
生活漢字
作文　読解　　タスク
語彙　初級文型

プロソディ♪

行動体験型学習

実体験を通し「わかる」を「できる」に
「世界は教室です」（学習者）

多様な学習者へのアプローチ

様々なライフステージにある学習者一人一人に応える
様々なライフステージにある仲間との協働を大切にする

《ユニット学習》
様々なライフステージにある学習者に応える

ユニットの入口は一つ・・でもその先に学習者の数だけ学びがある
教師は毎回の授業をデザインし、オリジナル教材を作成

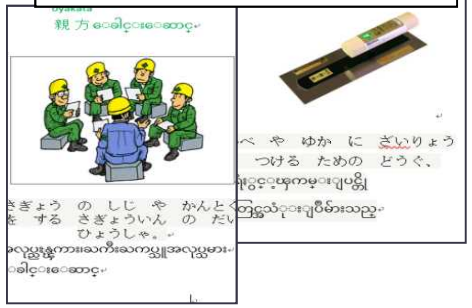
例：
ユニット10
仕事の
日本語

入門期の学習者には 基本的なコミュニケーション・挨拶

仕事に慣れていない第三国の学習者には 定住後の職場に特化した学習・疑似体験

図書館で
ボランティア体験

職場で使う基本語彙



キャリアアップ希望やかなりコミュニケーションができる学習者には

ビジターセッション （企業の人・先輩の話）
ニュースやドキュメンタリー視聴 （日本の就労事情）
作文・話し合い （仕事の夢・計画、経験談など）

《ユニット学習》

様々なライフステージにある仲間との協働を大切に

様々な背景・ライフステージの人がいる教室

↓

お互いの違いから学びあう

教師も含め一人ひとりが先生であり生徒である教室

条約クラスと第三国クラス、
大人と子供で多くの合同授業

↓

多様性を受け入れあう
教室文化

第三国と条約クラス、大人と子供がともに学ぶ合同授業

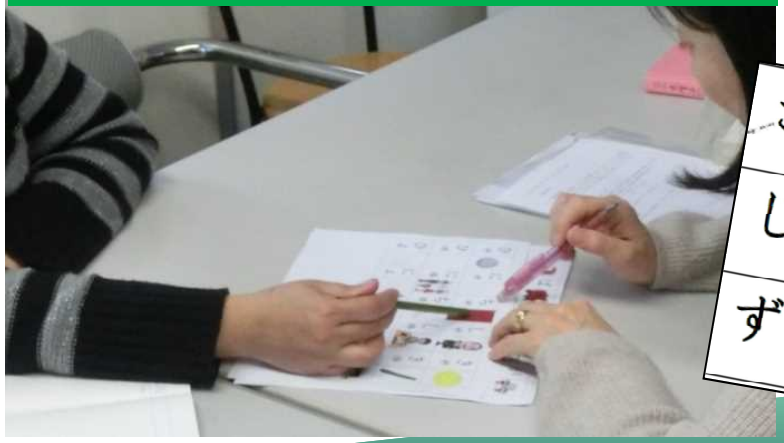
シリア人条約難民のお母さん

「RHQはひとつの家族です」

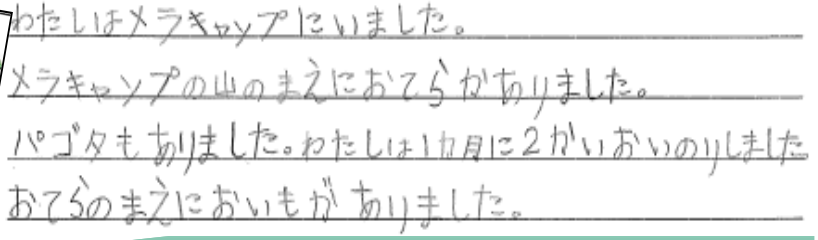
《読み書きの学習》
学習者の多様なニーズに寄り添う

レベル・ニーズに合わせた編成の文字クラス
・・開放型の配置

非識字者への個別指導
・・鉛筆の持ち方から始める



はじめての作文
・・やりとりしながら絵を描き
文へと繋げる

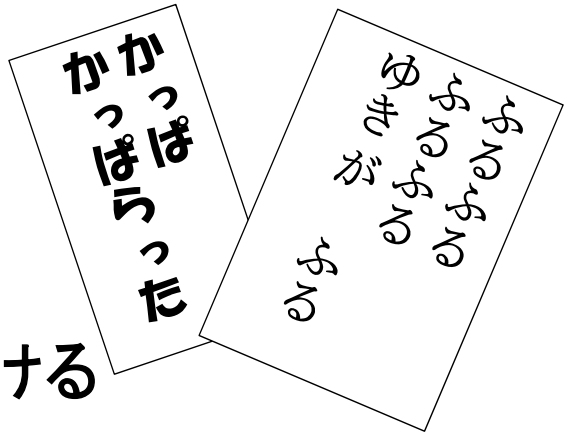


《♪プロソディ （詩と歌による学習）》
様々なライフステージにある学習者が思いを共有

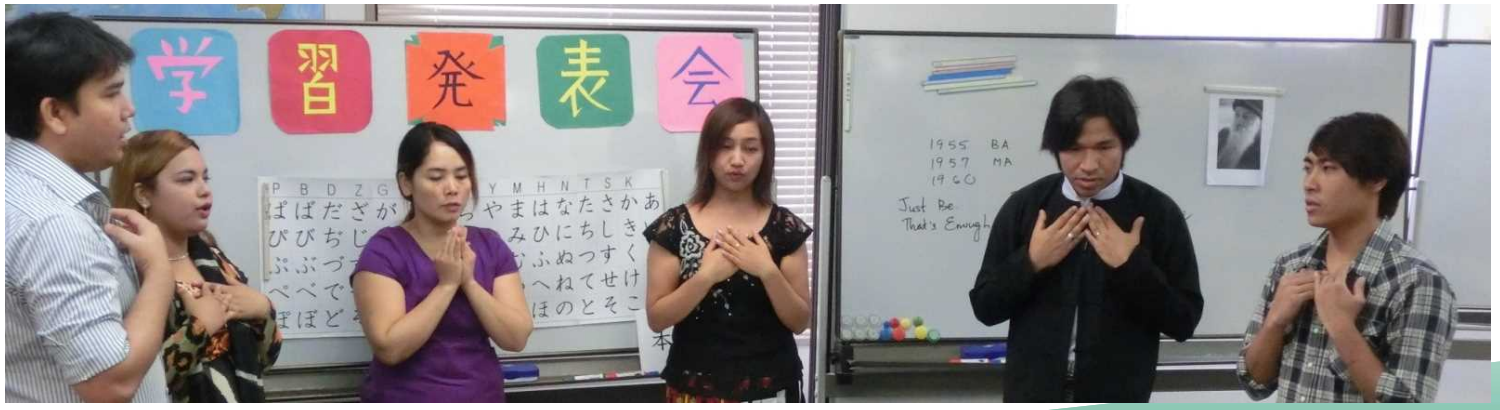
・ことばを五感で感じる

・ほんものに触れる

・日本語のリズムを自然に身につける



・レベル差が大きく、多様な背景の人たちがともに楽しむ



「ぶどうに種があるように　私の胸に悲しみがある・・・」（高見順「葡萄に種があるように」）

「私たちの“生きる”」 谷川俊太郎『生きる』

生きているということ
いま生きているということ
それはキャンプの友だちにあいたいということ
いつ日本語ができるかなとかんがえること
花を作ったり魚をとったりすること
テレビを見ること
じゆうを知ること

生きているということ
いま生きているということ
それは　友だちとみんなで
ごはんをつくること
ごはんをたべて　おいしいこと
キャンプで　カレンのふくを　おること
バッグやマフラーを　おること

生きているということ
いま生きているということ
それは日本でがんばって
しごとをするということ
ほっかいどうにりょ行するということ
ちばの海でおよぐということ
日本で日本語を勉強するということ

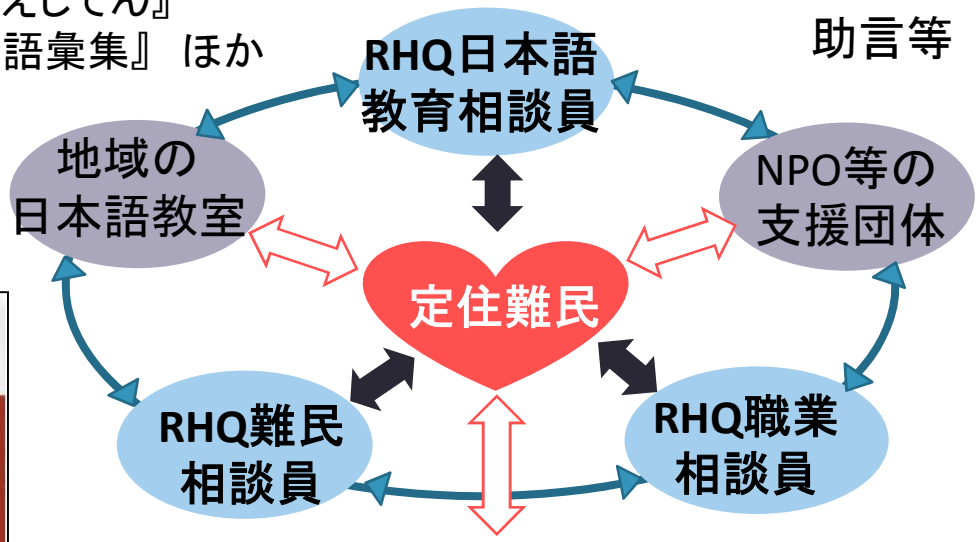
（学習者作品より）

定住支援プログラム修了後の支援

・・・学び続けるために

2．日本語教材の提供

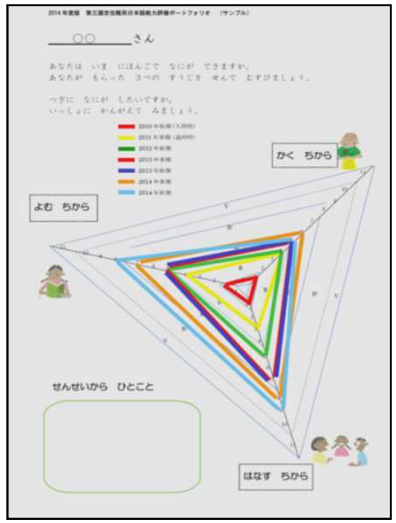
『社会参加のための日本語通信講座』
テキスト（ミャンマー語版・カレン語版）
『にほんごえじてん』
『用例付き語彙集』 ほか



関係省庁、地方公共団体・
事業所、学校等関係機関

1．日本語教育相談

難民と支援者に日本語学習の情報提供や専門的な指導助言等



3．第三国定住難民へ日本語能力モニタリング

半年毎に実施。調査結果に基づきポートフォリオ（上図）を難民と共有し、日本語能力向上のためにアドバイス。
必要に応じ関係者とも共有

4．第三国定住難民の日本語学習支援体制構築

定住先の地方公共団体等と連携を図りながらそれぞれの地域に合った方法で実施

ライフステージと日本語のニーズ

・・・学習者の声から

修了直後・・ 紹介された日本語教室に通う、もらった教材で学習する、と張り切って退所

↓

仕事が始まると・・ 現実は教室に通うのが精いっぱい

↓

さらに仕事が本格化すると・・ 残業もあるし、疲れて日本語学習まで手がまわらない

↓

2，3年後・・ 生活も落ち着いてくると、再度日本語学習の意欲が！

日本人の友達ともっと話したい
子供が学校に入学するから、日本語が話せるようになりたい
日本語ができるようになって、少し難しい仕事がしたい・・等々

ライフステージが進む毎に新たな日本語のニーズが！

子どもの学校　進学　キャリアアップ　地域の活動
転職　冠婚葬祭　高齢化
引っ越し　病気・入院

ライフステージに応じた日本語学習のために

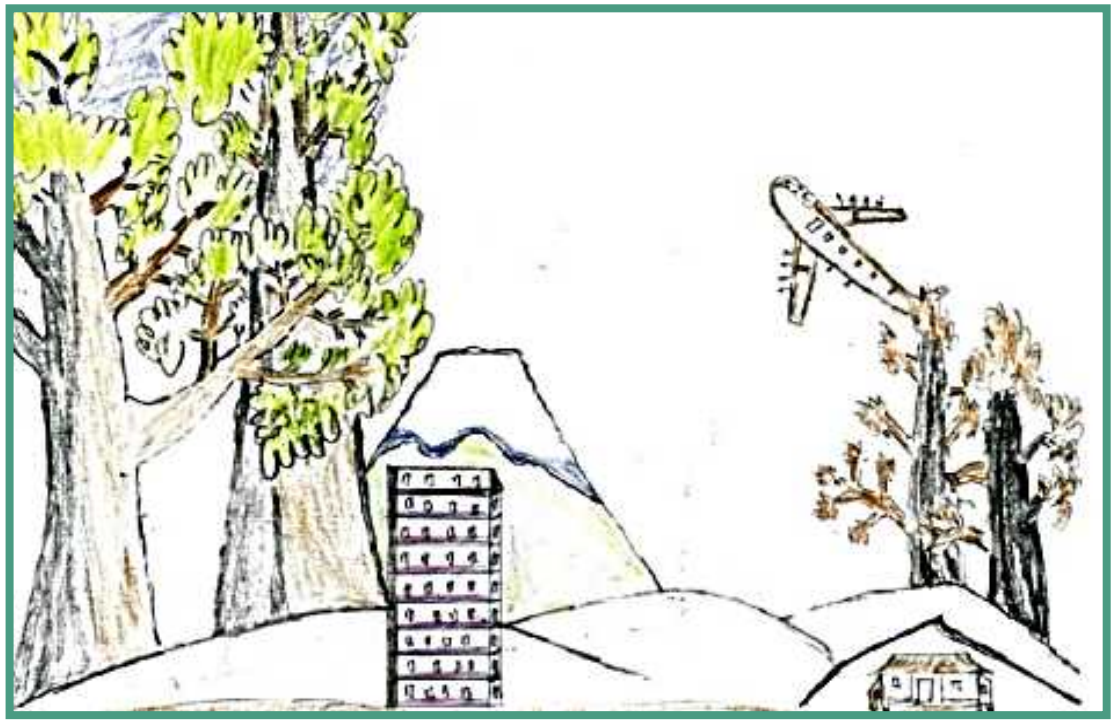
・学習者自身の学び続ける力を応援

・長期的なシステムの構築
プログラム修了直後：
社会生活を営みながら学習できる第2段階の創出

その後も生涯学習的な見地からライフステージに応じた
支援のプログラムを！

・私たちが変わること

・対象の拡大を！



「キャンプから日本へ」 2015年度修了生の絵より

ありがとうございました。

小瀧雅子
masako.kodaki@ajalt.or.jp